花だん用パンジーの播種育苗

パンジーは寄せ植えすると春から夏まで花を楽しむことができる。

北大農学部助教授
奥村実義

パンジー（サンシキスミレ）はヨーロッパの山岳地帯から北部にかけての原産で、夏の暑さと乾燥には弱いが、寒さには極めて強い草花である。

北海道では、大半の秋まき一年草が、越冬困難なために春まきを余儀なくされ、したがって春の模様花だんの材料に苦労するが、幸いなことにパンジーはよくできるので重宝に扱われている。

◇系統と品種

現在、花だん用パンジーとしてもっとも多く栽培されているのはスイス・ジァイアント系で、モンブラン（白、早生）、レーク・オブ・サム（青に黒目、早生）、ベルナ（紫、早生）、コロネーション・ゴールド（濃黄、中生）、ライン・ゴールド（黄に黒目、中生）、アルペン・グロー（濃紅に黒目、晩生）、ラズベリー・ローズ（紫紅に黒目、晩生）など品種も多い。

一方、これよりも一つ一つの花は幾分小さいが、早咲でしかも多花性なものにトリマルデュー系、ヒエマリス系があり、最近再び花だん用として関心を集めている。

アイス・キング（白に紫目）、チューリッヒゼー（青）、ヘリオス（濃黄）、ウインター・サン（黄に黒目）、ロード・ビーコンスフィルド（紫上弁白）、ワイン・レッド（ブドー配色）などがそれで、花だん用としては、むしろこのグループが検討されるべきであろう。

◇種子の知識

パンジーの種子は二〇〇グラムで約四千粒、光沢ある茶色の小粒で、濃色でつやのあるものが完熟種子、淡色なものほど未熟であって、発芽力が劣る。

発芽適温は摂氏一五～二〇度で、三〇度

第1表　種子の発芽温度　品種：スイスジァイアント・モンブラン

発芽＼温度	30°C	25°C	20°C	15°C	10°C	5°C	30～10°C 変温
発芽率（%）	67.5	79.0	80.5	81.5	66.0	4.0	80.0
発芽所要日数（日）	3.1	4.2	3.9	5.9	10.5	—	3.7

第2表　貯蔵種子の発芽力　品種：モンブラン，貯蔵前発芽率81％

貯蔵方法＼貯蔵年数	1年	2年	3年	5年	7年	10年
低温・塩化カルシウム貯蔵	%81	%76	%80	%69	%53	%10
室温・塩化カルシウム貯蔵	81	66	69	64	55	3
室温・紙袋詰めのまま放置	45	0	0	—	—	—

になると若干劣り、また一〇度以下でも劣る（**第一表**）。

種子の休眠はごく浅く、自家採種の場合播種期間近の採種々子では発芽がわるいが、一～二週間乾燥させると問題はない。

購入種子では休眠の問題は全くない。

むしろ、寿命が短く、一年たつと著しい発芽力低下を招くので、古ダネに注意する必要がある。余分な種子は乾燥貯蔵すれば数年間安全である（**第二表**）。

◇播種と育苗

暖地では秋まき（九月まき）とされているが、北海道では夏に播かなければ越冬準備が間にあわない。札幌附近で七月中～下旬が標準で、道南地方では幾分おそく（七月末まで）、道北地方では幾分早め（七月一〇日頃）がよい。

元来、暑さと乾燥に弱いものを、真夏に播種育苗するのであるから、ていねいに管理する必要がある。

播種床は風通しよく、日あたり、排水ともによい場所で、なるべく灌水に便利な方がよい。土壌は肥沃な壌土がよく、粘質地の場合には十分に培養土（堆厩肥と土を交互に積んでつくったもの）を客土する必要がある。床土はていねいに耕して、土塊をくだき、できれば八㌢程度のフルイを通しておく。

播種量は、タネの品質（発芽率）如何で違うが、通常良品で八〇㌘強とみてよいから、この場合床面積三・三平方㍍あたり一〇㌘程度（約二、〇〇〇粒）の割合とし、ていねいに撒播する。

この計算でゆくと、一、五〇〇～一、七〇〇株の発芽をみ、育苗中の故障株および定植時の捨て苗（育ち遅れや傷苗）を一〇～二〇㌘見込んでも、一、二〇〇～一、五〇〇株はえられることになる。

なお、播種に際して、タネにファイゴンなど消毒粉衣剤をまぶしおけば、苗立枯病防除効果が高められる。

覆土はタネが露出しない程度で、なるべくうすい方が発芽のそろいをよくする。

したがって、三～六㌢目のフルイを通しながら軽く覆土し、ジョーロで灌水した後点検して、タネの露出した部分だけ追加する方が望ましい。

播種後はヨシズで覆い、床土の表面が乾きすぎないように時々灌水する。

四～五たつと、タネは発芽しはじめ、ふた葉がみえはじめ、さらに数日たつと完全にはえそろうとともに、ふた葉はさらに大きくなり、本葉がのぞきはじめるから、この頃から徐々にヨシズをはずして日射に馴らすよう心がける。

播種後三週間もたつと、本葉がひらいてくるので、晴天の日中ごく暑い時間だけ日覆い（白寒冷沙の方がよい）を施す程度とし、一方灌水も徐々に減らしてゆく。

パンジーの育苗中、もっとも注意しなければならぬことは、幼苗時に乾きすぎないように管理すると同時に、かといって日覆いと灌水の施しすぎによって徒長苗をつくらぬようにすることである。

その後、定植期（九月上旬）まで放置するので、この間かなり苗は大きく育ち、こみあってくるから、一～二回銅水銀剤を撒布する必要がある。

◇定　植

苗の定植は、九月上旬頃に行なうのが標準であるが、早生系の品種では、育ちがよいと八月末頃から発蕾をみる場合があるので、苗床のこみ工合をみて少し早めてもさしつかえない。

定植床は予め酸土矯正、施肥およびヘプタクロール撒布によるヨトウムシ駆除を行なっておき、九～一二〇㌢幅の床ごしらえをする。土壌は壌土または砂壌土で、排水のよいところ（とくに融雪時冠水する場所はダメ）、やや肥沃な方が望ましい。

まだ暑くて乾燥しやすい時期なので、ひと雨待って土のしめりがよい頃合を見計らう方が得策である。

定植の間隔は一五㌢×一五㌢、したがって定植床に六（九〇㌢床）ないし八列（一二〇㌢床）植えとする。

定植苗数は、一㌃（三〇坪）あたり二、五〇〇～三、〇〇〇株となる。

◇定植後の管理

パンジーの秋苗は移植に強いので、よほど悪条件の時（晴天・乾燥）に植えたものでない限り、定植後の灌水や日覆いは必要ない。植えつけた苗はそのまま放置して冬越しするわけであるが、一〇月頃に一度除草しておく程度でよい。

定植苗は一〇月頃からかなり開花してくるが、放任してさしつかえない。

苗の越冬率は極めて高く、積雪地帯では植込み数の八〇㌘程度は翌春利用できるとみてよい。ただし、積雪が乏しくて凍土のはげしい地方（道東地方など）では、この越冬率は若干下回るのが普通で、したがって、苗生産は積雪地帯、しかも融雪時冠水しない場所に適することになる。

越冬苗は、融雪後四月下旬頃から再び開花する。この場合、越冬前についた蕾がまず開花するが、さらに株張りも大きくなって、続々と花をつける。

春の追肥は、融雪後できるだけ早く行なう。肥料は前年に仕込んだ肥料土（土と魚粕・菜種粕等をまぜて完全に腐熟させたもの）を全面にまく。

◇花だん植え（出荷）

花だんに植えつける（あるいは出荷する）のは、札幌附近で五月上旬前後、花が株あたり一〇輪前後の頃が標準であるが、多少早めた方が傷みが少ない。五月中旬以降になると、苗が伸びすぎて扱いにくい。

株は一株ずつ土をつけて掘りあげ、小口売用のものや輸送するものは紙で包む。

パンジーの花だん植え、出荷に際して予め考えておかなければならないことは、色別の各品種が、開花期がそろっていて同時に出荷できるように組合わせることである。

この点からみると、現在のように、スイス・ジァイアント系だけに頼るのは疑問で、ヒエマリス系の利用を考慮すべきである。

（園芸第二教室）